

の中にある「宗教」のイメージを付け加えていたと思います。それはイスラームそのものの中で、例えばスーフィズムが生まれてきたのとは違うなにかを付け加えている、そういう可能性があるような気がします。ですから、宗教を研究します、その宗教の1つとしてイスラームを選びますというような行き方よりも、やはりイスラームのありとあらゆる局面をとにかく学び、そして、その中で例えばスーフィズムがどういうふうにならぬ中で位置づけられるのかということを考えていくこと、それが重要なポイントではないかと思うようになりました。それは東大で勉強し、マッギルで勉強して、以後、なんとなく頭の中に生じてきた考え方です。

しかしながら同時に、矛盾する言い方かもしれませんが、「宗教」という眼鏡を用いることによってイスラームを見れば、やはりそこには違ったものも見えてくると思うのです。ですからそういった形で、イスラーム、あるいはキリスト教、あるいは仏教、そういったものの現象を1つの眼鏡で見たら、それぞれがどういう像を描き出すかというのもまた面白い、興味がある点だろうと思っています。

ですから、イスラームそのものを理解するために、イスラームの中でスーフィズムなり哲学なりを見ていかなければいけないというのは一番重要なポイントだと思いますが、同時に、違った種類の眼鏡でいくつかのものを見ることによって、それら相互の異同がより明らかになってくるということもあると思っています。

***** 質疑応答 *****

司会 (東長靖) ご講演ありがとうございました。では、ご質問をお受けしたいと思います。

イドリス・ダヌシュマン (立命館大学) 大変興味深いお話、ありがとうございました。私はイスラーム教徒で、自身イスラームの研究をしております。私のところでは、私の授業で宗教について初めて聞いて、その後で私のゼミをとる学生がいます。そのような学生にとって、宗教、そしてイスラームを勉強することで何が人生に加わるのか。2年間かけて勉強していても、大学を出てからの仕事には直接つながらないかもしれませんが、それでも役に立つというのを言いたいです。長い間研究された後、何かご意見はございますでしょうか。

鎌田 宗教の勉強をして何の役に立つかということですね。

イドリス 特にイスラームです。

鎌田 特にイスラームですね。当たり前の答えになるかもしれませんが、イスラームはこの現代の世界ではメジャーな宗教です。今の日本では少数派かもしれませんが、人間がどこで活動してもムスリムに出会う場はいくらでもあると思います。そういう場に居合わせた時にイスラームについての知識をもっているかないかでは随分違うと思います。ですから、イスラームについて知っているということは、学生さんが今後いるところで生きていくうえで役に立つはずだと言えます。これはやや実利的な見方になってしまったかもしれませんが。普通の日本人にとってイスラームはよく知らない宗教であり文化です。日本人がそのような異なる文化を知ることとは、

知らなかったことを知ることであり、人間の知の可能性の広さとか、人間知性の豊かさとかを知ることであり、知ること自体が学生さんの知的成長につながる意味があると思います。

森口遙平(京都大学) 貴重なお話、ありがとうございます。先生が幼少の頃から現在に至るまで、イスラームを中心としつつも、様々な宗教——日本の民俗的なものや大学時代の仏教・禅など——に興味をもってらしたことをお話しいただいたのですが、その様々な宗教を見ていく中で、すべての宗教や人間の思考に通底するようなものを、お感じになられたり、考えたりされたことがあれば教えていただきたいと思います。

鎌田 井筒俊彦が「東洋哲学」という知的試みを提出しており、諸宗教の間に通底する形而上学的存在理解のようなものを示しています。これは非常にすぐれたものだと思います。世界を有の面からとらえるのと無の面からとらえる二つの見方を提示しており、大乘起信論やイスラームの神秘思想(たとえばハイダル・アーモリー)にこのような観点が見られます。イスラームにあってこのような思索は意思し行動する神という面を無視してしまうので、イスラームから生まれた思索だとはいえ、イスラームを代表する思想だとはいえないように思います。各宗教に通底するものを考える場合、各宗教にあるもの、認められているもの、を考えないといけないように思います。イスラームにあっては(神秘思想のような)神の言葉を越えたものではなく、その言葉によって整理された思想や倫理規範がそれにあたると思います。ただ、そのレベルでの議論は宗教間相互で共通の場をもつことは本当の意味では難しいと思います。私にはそのようなことを論じる資格はないのですが、宗教間対話にかかわる論文を書いたことがあり、それぞれの宗教者が自分の宗教をいわば無にするような状態に入ることによって、他の人と共通の場が生まれるのではないか、各自が己れの宗教以前の状態に進む／戻る(個別宗教を離れる)ことによって人間同士の対話が可能になるのではないかと考えました。ただ、これも井筒の議論同様に個々の宗教の枠を越えていかないといけないので、さまざまな宗教に通底するものを探求するという議論の難しさを示すだけかもしれません。

澤井真(天理大学) 本日はいろいろなお話、ありがとうございます。先生は長い間、宗教学とかイスラーム研究の中でいろんな思想に触れる経験があったと思うのですが、ご自分の生きていく中で、そういったものがどういうふうにご自身に影響を与えていったかについてお教えてください。元々興味はなかったというお話をされたのですが、イスラームに触れて何か変わったことがあったりしたでしょうか。

鎌田 このご質問は「宗教学」の範囲を超えた質問かもしれませんね。私は宗教は面白いけれど宗教学はつまらない、といったりもしていますから、お答えになるかは分かりませんがしゃべってみましょう。私は生きて行くのが苦しく、暗い学生だったと思います。仏教の四苦八苦という言葉の説明を知り、これは真理だと思いましたし、今もそう思っています。この苦から脱する教えが仏の教えであり、人がさまざまいるようにその度脱の道は多様です。イスラームという宗教を受け容れることで苦から離れられるならこのイスラームという道も仏の教えになるでしょう。ただ、私はそういう形ではイスラームには関わっていません。魂の問題についてすぐれた教説を仏教が持っていることは苦のなかにある者としてひとつの燈になったように思います。このような「偏見」がある

ので、イスラームをながめた場合、魂の問題をきちんと論じるのはスーフィズムと哲学（ファルサファ）の教説の一部以外にはないですし、自分がなにかするならばこの領域以外にはないだろうと思いましたが。魂が完成を目指して進むという過程をイスラームの神秘家たちが種々に論じており、それを追っていくと最終的には神のもとに到達するようなことも言っています。日々文句をいいながら回りに迷惑をかける存在でしかないですが、自分自身を見つめる見方のようなものをそういった議論は示唆してくれているように思っています。

司会 先生には、40年以上ご厚誼を忝くしておりますけれども、今日初めて何う話もたくさんありました。私はやはり、厳格な文献思想研究者というイメージで、尊敬を持って先生にずっと接してきたのですが、民間信仰まで関心がおありとか、もっと広い視野で物事を見てこられたことを教えていただきました。先生、今日はありがとうございました。

鎌田繁先生——業績——

- [a] 単行書など
- [b] 論文など
- [c] 小論文・事典項目・学会発表要旨・資料紹介など
- [d] 書評・新刊紹介など
- [e] 翻訳など
- [f] エッセイその他

1976 年度

- ・「イスラーム神秘主義—サッラージュのシャタハ（shath）観について」『宗教研究』第50巻第3輯（230号）、181-182頁 **[c]**
- ・「コーラン」（I、500-501）、「サヌッシー教団」（VI、117）、「シーア派」（VI、230）、「スーフィズム」（VII、485）、「スンニー派」（VII、534）、「マホメット」（XIII、87）、「メフレビー教団」（XIII、372）、「ラマザン」（XIV、179）、『国民百科事典』平凡社、（1976-1977年） **[c]**

1977 年度

- ・「サッラージュの神秘階梯説」『オリエント』第20巻第1号、1-15頁 **[b]**
- ・「S.H.Nasr, *Islam and the Plight of Modern Man*」『宗教研究』第51巻第1輯（232号）、109-112頁 **[d]**

1979 年度

- ・「サッラージュによるスーフィーの理想的生活について」『日本オリエント学会創立二十五周年記念オリエント学論集』日本オリエント学会編、刀水書房、181-199頁 **[b]**

1982 年度

- ・“Nābulūsī’s Commentary on Ibn al-Fāriḍ’s *Khamrīyah*”, *Orient*, 18, pp. 19-40 **[b]**